インド・スタディツアー
～インドで子どもに会って考える旅2009～
報告書

ツアー期間：2009 年 8 月 28 日（金）～2009 年 9 月 5 日（土）

特定非営利活動法人 ACE（エース）

はじめに

この報告書は、2009 年 8 月 28 日（金）から 9 月 5 日（土）に行われたインド・スタディツアー「インドで子どもに会って考える旅 2009」のまとめとして、ツアー参加者による訪問記録や感想文をもとに、特定非営利活動法人 ACE が編集し、作成しました。

学生から社会人、退職された方まで幅広い年齢層の男女 17 名が本ツアーに参加し、それぞれが得た学びや体験が記録されています。本書が、児童労働の現状やその取り組みについて、また本ツアーの概要について関心を持っていただくきっかけになれば幸いです。

特定非営利活動法人 ACE（エース）について

世界には、学校に行けず、重労働によりけがや病気の危険にさらされている子どもが 2 億 1800 万人います。特定非営利活動法人 ACE（エース）は、世界中のすべての子どもが権利を守られ、希望を持って安心して暮らせる社会を実現するため、市民と共に行動し、児童労働の撤廃と予防に取り組む国際協力 NGO です。1997 年に学生の有志によって設立されました。インド、ガーナで子どもを児童労働から守り、教育を推進する活動や、日本国内で児童労働の問題を伝える啓発活動や、政府や企業への政策提言、ネットワークの活動を行っています。

児童労働とは

子ども（18 歳未満）のうち、15 歳未満の義務教育就学年齢にあたる子どもたちの教育を妨げる労働、また、15 歳～17 歳の子どもも含めた危険・有害労働を、児童労働といいます。この定義は、国際条約に基づき、国際的に児童労働問題に取り組む組織の間での共通概念となっています。

児童労働に関する主な国際条約には、就業が認められる年齢を義務教育終了年齢 15 歳とする「最低年齢条約（ILO 第 138 号条約）」や、最も危険で有害とされる労働の即時撤廃をもとめる「最悪の形態の児童労働条約（ILO 第 182 号条約）」があります。

児童労働を判断する基準は以下のようなものがあり、一つでも当てはまれば、児童労働となります。

①教育を妨げる	例） 労働によって学校に行けない
②健康的な発達を妨げる	例） 重い荷物運び、長時間同じ姿勢での仕事
③有害危険なもの（心身の健康、安全、モラル）	例） 危険な刃物や機械、農薬などの使用
④搾取的である	例） 売春・ポルノ、子ども兵士など

一方、家の手伝いやアルバイトなど、教育を受けられ、子どもの年齢・成長度合いに見合うもの、また、健康的な成長を助けたり責任感や技能を身につけたりすることができるものは、子どもの仕事（Child Work）とされ、児童労働には含まれません。

目次

はじめに……2
特定非営利活動法人 ACE について……2
児童労働とは……2
1. ツアーの概要……4
1-1 目的……4
1-2 訪問場所……4
1-3 全体の流れ……5
1-4 日程……6
1-5 滞在先・訪問組織の概要……7
2. 訪問記録……9
2-1 バル・アシュラム……9
2-2 「子どもにやさしい村」プロジェクト……16
2-3 バタフライズ……20
2-4 タラ・プロジェクト……21
2-5 ILO（国際労働機関）南アジア地域事務所……22
2-6 NIFAA（全国芸術家・活動家統合フォーラム）……23
3. 参加者による帰国後の活動……25
4. 参加者の感想……27
5. 参加者名簿……45

1. ツアーの概要

1-1 目的

スタディツアーは学びの旅
「スタディツアー」とは、単なる観光目的の旅行ではなく、NGO など国際協力活動の現場を訪れ、体験学習を通じて現地事情への理解や住民との相互理解を図ることを目的とするツアーのことを言います。

本ツアー「インドで子どもに会って考える旅」の目的

・インドの児童労働の現状を知る
・児童労働問題に取り組む活動について理解する
・ACE が支援している「子どもにやさしい村」プロジェクトやパートナー団体の活動、支援の成果について理解する
・子どもたちや児童労働に取り組む人たち、住民との交流を通じて、インドの社会状況、人々の生活について理解する
・児童労働問題の解決のために自分たちには何ができるかを考える

1-2 訪問場所

インド
ラジャスタン州ジャイプル県ヴィラトナガルの農村地域
- バル・アシュラム（子どものリハビリ施設）
- 「子どもにやさしい村」プロジェクトが実施された村

首都デリー
- バタフライズ（ストリートチルドレンのための NGO）
- タラ・プロジェクト（フェアトレード団体）
- ILO（国際労働機関）南アジア地域事務所
- NIFAA（全国芸術家・活動家統合フォーラム）

※各訪問先の組織の詳細は、
「1－5 滞在先・訪問組織の概要」をご参照ください。

1-3　全体の流れ

2009 年度のスタディツアーは、以下の流れで、実施されました。

【ツアーの参加募集案内】 5 月～7 月

ツアー概要についての説明会の実施や、ウェブサイトなどを通して参加者の募集を行いました。

【参加者決定】 7 月中旬

関東・中部・九州地方から、学生や社会人など合計 17 名の参加となりました。
（参加者名簿は 45 ページをご参照ください）

【事前学習会】 7 月 25 日

参加者同士の自己紹介、児童労働について理解するための「感じてみよう　働く子どもの気持ち」ワークショップを行いました。また、ツアーの訪問先や参加にあたっての注意事項についての説明もありました。

【ツアー実施】 8 月 28 日～9 月 5 日 （7 泊 9 日）

インドへ出発。7 泊 9 日にわたって現地の施設や NGO などを訪問しました。

【帰国】

参加者全員が無事に帰国しました。
帰国後は、各自ツアーを振り返りながら訪問記録や感想文を執筆しました。また、ACE が出展する他のイベントにボランティアとして参加するメンバーもいました。

【報告会の実施】 10 月 24 日

一般の方を対象にしたツアー報告会を行いました。ツアー参加者が、各訪問先やツアーに参加して学んだことや感じたことを発表し、グループでの話し合いや質疑応答などを行いました。
報告会の後はインド料理屋で、懇親会も行いました。

また、ツアー参加者がそれぞれ学校、職場、地域でツアーの報告をする機会を設けるなど、自発的な活動が行われています。

1-4 日程

月日	活動内容	宿泊
8/28(金)	1230 成田空港出発(JL471) 1735 デリー着(夜)	デリー ホテル泊
8/29(土)	午前 デリー市内視察、買い物 午後 ラジャスタン州へ出発(260 キロ、車で 4ー5 時間) バル・アシュラム(子どものリハビリ施設)に到着 夕方 オリエンテーション(BBA、バル・アシュラムについて)	ラジャスタン州 バル・アシュラム泊
8/30(日)	朝 バル・アシュラムの子どもたちと交流 午前 オリエンテーション(インドの児童労働、BBA、プロジェクトについて) バル・アシュラムの子どもたちによる運動会に参加 午後 子ども村議会のミーティング見学と子どもへのインタビュー 夕方 バル・アシュラムの子どもたちと交流 夜 BBA スタッフ・子どものインタビュー	ラジャスタン州 バル・アシュラム泊
8/31(月)	朝 子どもたちと一緒に体操、ヨガ 午前 バル・アシュラムの施設と子どもの活動の様子を見学 午後 「子どもにやさしい村」プロジェクトが実施されている村の住民へのインタビュー 夕方～夜 バル・アシュラムの子どもたちと交流	ラジャスタン州 バル・アシュラム泊
9/1(火)	朝 子どもたちと一緒に体操、ヨガ 午前 「子どもにやさしい村」プロジェクトを実施している村を訪問 住民や子どもへのインタビュー 昼 デリーへ出発 (夕方 デリーに到着)	デリー ホテル泊
9/2(水)	午前 バタフライズ事務所訪問 午後 タラ・プロジェクト事務所を訪問 夕方 ツアーの振り返り、ディスカッション	デリー ホテル泊
9/3(木)	朝 アグラへ移動(電車で 2 時間) 午後 世界遺産・タージマハール観光 午前 アグラからデリーへ出発(車で 5-6 時間)	デリー ホテル泊
9/4(金)	午前【別行動】ACE チーム : ILO 南アジア地域事務所訪問、デリー市内視察 明星大チーム: NIFAA との交流、デリー市内視察 午後 空港へ移動 ⇒1700 空港到着 1935 デリー出発 (JL472)	機内泊
9/5(土)	0725 成田空港到着、解散	

1-5 滞在先・訪問組織概要

1）バル・アシュラム

現地 NGO、BBA によって 1998 年に設立された、児童労働から救出された男の子のためのリハビリテーション施設。子どもたちへの基礎教育や職業訓練、衛生教育、文化教育、人格教育などを実施し、子どもたちの社会復帰を目指している。 子どもたちはバル・アシュラムで約 6 ヶ月～1 年間生活し、その後、家族の元に帰って学校に通ったり、18 歳以上なら仕事に就いたりして生活する。故郷に帰っても教育を受けられない場合は、バル・アシュラムに残って周辺の公立学校へ通う子どももいる。

ウェブサイト：http://www.bba.org.in/balashram/

BBA（ビー・ビー・エー）

ACE のパートナー団体。児童労働のない社会を創り、すべての子どもが質の良い教育を受けられることを理念とし、1980 年に設立されたインドの NGO。BBA（Bachpan Bachpao Andolan：ヒンディ語）とは、英語で Save the Childhood Movement（子ども時代を救え運動）を意味する。児童労働者の救出とリハビリ、「子どもにやさしい村」プロジェクトの実施、市民への啓発キャンペーンや政府へのロビーイングなどを行っている。これまで 7 万人以上の子どもを児童労働から救出し、15,000 人以上の子どもにリハビリ支援を行っている。

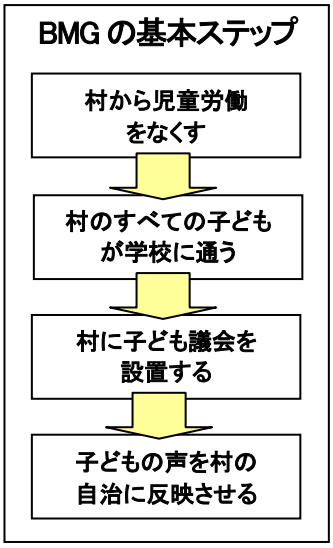
ウェブサイト：http://www.bba.org.in/

2）「子どもにやさしい村（BMG）」プロジェクト

「子どもにやさしい村（ヒンディ語で Bal Mitra Gram）」プロジェクトは、BBA の活動の一つであり、インドの貧しい農村で児童労働がなくなり、すべての子どもたちが学校で学べるように支援するプロジェクトである。

子ども、親、学校を含めた村の住民全体を対象とし、教育に対する意識改革をすることによって子どもの就学を徹底させている。さらに、子どもの声を村の自治に反映させるための取り組みとして、「子ども村議会」を組織し、子ども自身による選挙やミーティングを行って村の議会に改善策を提案するなどしている。

ACE は 2003 年からこれまで BBA と共に、ウッタル・プラデシュ州の 5 つの村、ラジャスタン州の 4 つの村でプロジェクトを行ってきた。



ウェブサイト：http://acejapan.org/modules/tinyd3/index.php?id=2（日本語）
http://www.bba.org.in/programmes/bmg.php（英語）
http://acejapan.org/modules/bulletin/article.php?storyid=123（2008 年の訪問報告）

3）バタフライズ

1989 年の設立以来、路上で生活する子ども、働く子どもたちを対象に活動する NGO。子どもを施設に入れるのではなく、駅や市場など、実際子どもが働いている場所で活動していくことを特徴とする。

インド国内の 4 地域と南アジア 4 カ国で活動を広げ、主な活動地域であるデリーでは、市内 12 か所のコンタクトポイントを通して約 1500 人以上の子どもたちと活動している。

ウェブサイト：http://butterflieschildrights.org/home.asp（英語）
http://acejapan.org/modules/bulletin/article.php?storyid=118（2008 年の訪問報告）

4）タラ・プロジェクト

経済的に不利な状況に置かれる職人の自立を支援するため、1970 年代から活動をはじめたフェアトレード団体。フェアトレードの精神に基づき、立場の弱い人々に対し、職業の場を提供するとともに、技術訓練やインフォーマル教育などの活動を行っている。また、児童労働を使わないことをフェアトレードの基準にしており、児童労働防止のためのアドボカシー活動なども行っている。

現在、ウッタル・プラデシュ州、ビハール州、ハリヤナ州などで製品が生産されており、ヨーロッパ、日本などへの製品を輸出・販売している。フェアトレードの国際ネットワーク「国際フェアトレードフォーラム」にも加盟している。

ウェブサイト：http://www.taraprojects.com/（英語）
http://acejapan.org/modules/bulletin/article.php?storyid=126 （2008 年の訪問報告）

5）ILO（国際労働機関）南アジア地域事務所

ILO（国際労働機関）は 1919 年に設立された、加盟国の政府・労働者・使用者の代表で構成される労働に関する国際的な専門機関。「ディーセントワーク」を掲げ、すべての人がよりよい仕事をもつこと目指し、雇用促進や社会保障充実のために働きかけている。このディーセントワークの中には、許されない形態の労働を廃絶することも含まれており、児童労働撤廃にも積極的に取り組んでいる。

＜ILO-IPEC（児童労働撤廃国際計画）＞

ILO-IPEC（International Programme on the Elimination of Child Labour）とは、「最悪の形態の児童労働」の撤廃に重点を置き、最終的には全ての児童労働をなくすことを目標として、1992 年に開始された ILO の技術協力プロジェクトである。インドは 1992 年当初から IPEC に参加しており、100 以上の大学、研究機関、使用者が関わっている。政府の児童労働政策や教育政策と連携し、行動計画作成や調査の実施の他、意識啓発、子どもの救出とリハビリテーション、家族の収入向上に取り組んでいる。

ウェブサイト：http://acejapan.org/modules/bulletin/article.php?storyid=126 （2008 年の訪問報告）

6）NIFAA（全国芸術家・活動家統合フォーラム）

若者による社会文化活動団体。人々の相互理解と共生、潜在能力の育成や人格形成、立場の弱い人々の支援などを目的とし、歌やダンスなどを通した文化活動や、国家統合、ジェンダー、保健医療分野での啓発・支援活動を行っている。児童労働についても、文化活動を通した啓発活動を行ったり、親に子どもの就学を呼びかけたりするなど、児童労働の撤廃のため努力をしている。

ウェブサイト：http://www.nifaa.com

2. 訪問記録

2-1　バル･アシュラム

1）児童労働についてのオリエンテーション

日時:2009 年 8 月 30 日、午前
場所:バル･アシュラムのミーティング･ルーム
記録担当者:中本映子、竹内悠

＜児童労働に関するビデオ鑑賞＞

児童労働は最悪の人権侵害であり、世界に残る最後の奴隷制度でもあります。その労働環境は厳しく、暴力や人身売買によって強制労働をさせられているケースや、賃金をもらっていないというケースもしばしば見受けられます。インドでは 1976 年より法律で債務労働が禁止されていますが、未だ親の借金のために働かざるを得ない子どもは多く、またそれによって罰せられた雇用者はいません。債務労働では、稼いだお金が利息と生活費に消えてしまいます。

そのような状況下から、BBA はインドで約 7 万 7000 人を救ってきました。劣悪な労働環境から子どもたちを救出し、医療･カウンセリング･教育などを与えています。児童労働から救出されてきた子どもは、おとなへの信頼はもとより、希望や自尊心を失い、愛情を知らず感情表現が苦手です。そのような子どものために BBA はリハビリ施設である「バル･アシュラム」を 1998 年に設立し、多くの子どもたちを受け入れてきました。

また BBA は現在、行政局と共に強制捜査および救出を行い、さらに予防という観点から「子どもにやさしい村」プロジェクトを実施しています。「子どもにやさしい村」プロジェクトは、児童労働を未然に防ぐための村全体での取り組みです。活動家を育成し、住民たち自身が本来持っている権利を行使できるような手助けをしています。つまり、学校の無いところに学校を建てるのではなく、本来学校を建てるべき地方政府にきちんと実行してもらうために村全体を改革する活動なのです。

＜質疑応答＞

Q. 「子どもにやさしい村」プロジェクトについて、意識改革は大変ではないですか？ その方法は？事前調査は？

A. まず事前調査で、どの地域で子どもが働かされているのかなどを十分調べ、時間をかけてプロジェクトを実施する村を選定します。そしてプロジェクトの実施が必要な際には、村のリーダーと話をして実施を提案します。村長や村のリーダーの方々と関係を密にとり、信頼を構築することをとても重視しています。

＜感想＞

児童労働をなくすには法律などの枠組みももちろん大切ですが、それだけでは不十分で、周りの環境や意識から変えていかなければ根本的な解決にはならないと感じました。

2) BBA スタッフ、救出された子どもへのインタビュー

日時:2009 年 8 月 30 日、夜
場所:バル・アシュラムの図書館
面会者:サノージさん(BBA スタッフ)、
　　シブシャンカ君(14 歳)、アルビンド君(11 歳)
記録担当者:嶌津風花、伴野保志

＜BBA の概要＞

BBA は、1980 年にカイラシュ・サティヤルティ氏によって、児童労働により強制労働を強いられた子どもを開放し、教育の機会を与えるために設立されました。今では、インド全国に約 100 人のスタッフがおり、7 万人以上の個人の有志と、約 750 の組織と提携して活動を行っています。

1998 年に国際協力 NGO「児童労働に反対するグローバルマーチ」と共に、すべての子どもに平等の教育の機会を求めた「教育マーチ」を行いました。マーチには、インドだけではなく世界中でたくさんの人が参加しました。

デリー周辺で救出された子どもは、リハビリ施設である「ムクティ・アシュラム」で保護され、可能ならばそこから家に帰され、さらに長期的なサポートが必要な場合は他の施設に移されます。女の子はニューデリー市内にある「バリカ・アシュラム」という施設で、男の子はラジャスタン州にある「バル・アシュラム」で生活し、ノンフォーマル教育や職業訓練を受けたり、近くの学校に通ったりします。BBA は、人身売買、虐待を受けた子どもたちの情報を収集し、政府機関、警察と協力して、今までに 77,453 人を救出しました。子どもたちの中には、レンガ、採石場、カーペット産業、サーカスなどの場所で強制的に働かされていた子が多くいます。

また BBA は「子どもにやさしい村」プロジェクトも行っており、現在ではインド国内の 15 州にある約 200 の村で、子どもたちと一緒に村の改善に取り組んでいます。これらの村では、子どもの就学率の向上、特に中途退学の多い女の子の就学に優先的に取り組んでいます。インドのカーストの中で階級が低いとされる人々への教育や社会進出、自助グループの育成、村の自治体の強化などに、各村の活動家が中心となって働きかけます。また政府による雇用や社会保障などの制度も住民が活用できるようにサポートしています。

「子どもにやさしい村」プロジェクトは、インドの中で最も貧しい地域と言われるビハール州から始まり、現在は北インドを中心に活動し、人身売買が多いネパールにも活動の輪を広げています。

＜シブシャンカくんの話＞

4 歳からビハール州の繊維工場で 1 日中働かされていたところを警察に救出され、BBA の助けを得てバル・アシュラムに来ました。働いていた工場では、ミスをすると雇い主に木の棒で殴られ、食事も一日 2 回だけで満足にもらえませんでした。雇い主は両親に対して、賃金と私への教育を約束していましたが、守られることはありませんでした。家に帰りたくても帰してもらえませんでした。救出されたときは私の他に 59 人の子どもたちが一緒でした。1 ヶ月間家に帰りましたが、勉強をしたくても近くに学校がないので、再びバル・アシュラムに来ました。

Q. 何が一番嫌でしたか？

A. *殴られて乱暴に扱われたこと。雇い主が噛みタバコを噛み、汚くて嫌でした。木の棒で殴られるのもとても嫌でした。*

Q. 救出された時はどう感じましたか？

A. *警察に逮捕されて牢屋に入れられるのではないかと怖かったです。でも、救出されたと知って安心し、今はバル・アシュラムで勉強できることがとてもうれしいです。*

＜アルビンド・クマールくんの話＞

ネパールで生まれ、村の近くのホテルで皿洗いをさせられていました。9 才から 11 才まで 2 年間、朝 5 時から夜 10 時まで働かされていました。他に兄弟が 2 人いますが、3 人とも別々のホテルで働かされていて、私がいたホテルでは他に 8 人から 10 人の子どもが働かされていました。寝る場所はキッチンの床で、食事は 1 日 3 食ありましたが、満足できる量ではなく、いつもお腹がすいていました。

2、3 ヶ月家に帰りましたが、家での生活になじめなかったので、1年間バル･アシュラムで暮らして、1 ヶ月家に帰るというサイクルで生活をしています。去年小学校 5 年生を卒業しました。41 人中 3 番目の優秀な成績を修めました。

Q. 今の生活はどうですか？

A. バル･アシュラムでの生活と、勉強が楽しいです。

Q. 将来の夢は何ですか?

A. 軍人になることです。

＜感想＞

教科書の写真と文字やテレビ゛の資料映像ではなく、実際に子どもたちを前にして児童労働の体験を聞いてとてもつらかったです。彼らの話し方や表情から、その話は第三者がただ単に興味本位で聞いていいものではなく、真摯に受け止めなければいけないのだと思いました。質疑応答のとき、私は子どもたちにどこまで聞いていいのか分からず困惑してしまいました。ちゃんと理解をしたいから質問をしようと思う反面、その質問で彼らを傷つけてしまうのではないかという不安があったからです。結局、私は質問することができませんでした。しかし、彼らから学んだものは大きく、私の価値観を変えるものでもありました。

活動の一翼を担うサノージさんの話は、重みのある、とても力強いものでした。ツアーに参加して3回目の今回は、年々BBAとバル･アシュラムの活動の輪が少しずつ広がっていくのを、とても頼もしく感じました。特にネパールまで拠点を広げたことがとても印象的でした。シブシャンカくんとアルビンドくんの話も、こんなに小さい体の子たちに、過酷な労働の日々があったことに、いつも胸が痛みます。でも元気に立ち直りつつあることへの生命力の強さを称賛したいです。

3） バル･アシュラムについてのオリエンテーション

日時：2009年8月29日、夜
場所：バル･アシュラムの食堂
記録担当者：川俣真理絵、母袋愛子

＜バル･アシュラムについてスタッフによる説明＞

バル･アシュラムには、20人のスタッフに、マネージャーが1人、先生が3人、食事の係が6人。子どもは現在105人で、近くの学校に通う子、職業訓練を受けている子などがいます。また、周辺の村に住んでいる子でバル･アシュラムに職業訓練を受けに来る子もいます。パソコンのクラスもあり、先生が来て毎日30人くらいがパソコンの教育を受けます。

バル･アシュラムでは、一日の生活リズムが決められています。子どもたちは朝5:00の散歩から始まり、お祈り･ヨガ、草刈りなどの掃除、水浴びをして朝食を食べ、午前中は近くの学校に通ったり、ノンフォーマル教育を受けたりします。昼食の後は、また教育を受けたりグループ討議や道徳の授業を受けたりし、草刈りをします。17:30～18:30はゲームをして、その後お祈りがあり、水浴びをしてから夕食を食べます。その後は、バル･アシュラムのドキュメンタリーを見たり、土日は映画を観たりします。そして22:00に消灯といった生活です。

バル･アシュラムでは、児童労働から解放された6～14歳の子どもたちが生活しています。生活する期間は、今までは6ヶ月でしたが、今年から1年間になりました。しかし、親のいない子どもたちはずっとそこで生活することになります。バル･アシュラムから出た子どもたちは、勉強を続けたり、職業訓練を受けた子は店を出したりして生活しています。

＜感想＞

時間など決まりごとがたくさんあるようでしたが、年上の子がうまくリーダーシップをとっていることでちゃんと守れているようですごいと思いました。子どもたちは将来どうなるのだろうと思っていたけど、勉強を続けたりお店を出したりすると聞いて安心したし、意識が強いと思いました。生活していくために働かないといけないし、働くためには勉強が必要という意識があるのはすごいことだけど、幼いうちからその考えを持っているということに、複雑な気持ちになりました。

※ノンフォーマル教育とは
正規の学校教育以外で行われる教育活動。バル･アシュラムの子どもは、過去に十分な教育を受けてこられなかった子がほとんどであるため、基本的な英語･ヒンディ語の読み書きや計算などの教育を行い、正規の学校への就学を支援している。

4）バル･アシュラム施設見学

日時:2009 年 8 月 31 日、午前
場所:バル･アシュラムの図書館、保健室、職業訓練所、
　　ミーティング・ルーム、寮
面会者:バル･アシュラムのスタッフの方々
記録担当者:田柳優子、竹内悠、石田恵理、並木祥子

＜バル･アシュラムの施設見学＞

午後から学校に行く子どもたちは午前中に寮のベッドの上で予習をして過ごします。寮ではスタッフが決めた部屋割りに基づいて子どもたちが寝泊りしており、共同スペースには子どもたちの誕生日と夢を書いたタペストリーや、正しい歯の磨き方や世界の偉人一覧など、子どもたちが興味を持ちつつ知識を得られるような掲示もあります。

図書館内にあるパソコン室では、毎日 16 時からにパソコンの勉強が行われています。現在は英語以外に地方言語が使えるソフトがないため、パソコン教室に来るのは、学校に通っていて英語の読み書きができる子どもが中心です。職業訓練をしている子どもたちも時々参加しています。インターネットには 9 月から接続予定ですが、現在は 15 人がジャイプルに行って基本操作を学んでいます。ここにあるパソコンは、日本のロータリークラブから寄付されたものです。

9 月にオープンする保健室は、子どもたちの健康管理のために作られました。スペースは狭いのですが、清潔感のある、整った施設です。外部から医師や看護士を呼び、月に 2 回健康診断も行います。

＜バル･アシュラムでの教育＞

バル･アシュラムでは、子どもたちの関心に合わせて職業訓練を行っています。特に、ある程度の年齢に達した子については、基本的な教育を身につけさせた後は職業訓練を受けさせる傾向にあるそうです。職業訓練所では、大工、溶接、電気、仕立て、ペインティングの訓練が行われています。期間は約1年間で、その間に子どもが就職に対する希望を持てるようになることが大切です。これまで約 400 人余りが訓練を受け、中にはバル･アシュラムを出た後、それぞれの店で見習いを終えて自分の店を開いた子もいます。

各訓練では、基礎を学ぶところから始まり演習を経て、実際に店を開くときの手続きまで学びます。バル･アシュラム内の窓やドア、子どもたちの制服などは、訓練を受けた子どもたちによって作られ整備されています。仕立てとペインティングは子どもたちの間で人気が高いそうです。学校に通いながら、アルバイトとして訓練で学んだことを生かした仕事をする子もいます。

バル･アシュラムでは小学校 1～3 年生の年齢の子どもたちに対して基礎教育を与えるノンフォーマル教育の授業を行っており、30～40 人ほどの子どもたちが英語のアルファベットや数字を学んでいます。ここで生活する子どもの約 90%が読み書きができないため、正規の学校へ通えるよう識字教育を行っており、英語とヒンディ語の両方を勉強します。子どもの学習レベル別に 3 つのグループに分けた授業、毎月のテスト、授業前の新聞の読み合わせなど様々な工夫がされています。子どもたちの教育レベルを本来の水準にまで引き上げ、正規の学校では年齢に合った学年に通えるようにします。ほとんどの子どもは、小学校 4 年生くらいからバル･アシュラムの近くにある正規の学校に行くようになります。

また、基本的な教育だけでなく、児童労働に対する知識、子どもの権利、一般常識、社会の現状（平和、戦争・・）などについても授業やディスカッションを行います。

＜質疑応答＞

Q. 24 時間体制でスタッフが対応しているそうですが、子どもの精神的なケアはどのように行っていますか？

A. トレーニングを受けたスタッフは、生活面以外に精神面のケアも行っており、1 ヶ月のうち 15 日間滞在するプロのカウンセラーとも連携して子どもたちの発達を促します。児童労働により人権を侵害されて劣等感を抱えた子どもたちも、これらのカウンセリングなどにより 15 日から 1 ヶ月で変化が見られるようになります。

Q. 職業訓練を終えた子どもの就職先について教えてください。

A. 就職先の斡旋は各地域のネットワークを活用してスタッフが行い、雇用者は子どもたちが児童労働していたという背景についても理解した上で雇ってもらいます。

Q. 読み書きができない子どもについて、皆必ず学校に通えるようになるのですか？

A. 教師の方によると、8 歳以上の子はそれまで働いていた環境の影響もあり、勉強での集中力が低く、理解力が欠ける傾向にあるといいます。カイラシュ君という子は運動能力が優れていてクリケットの良い選手でしたが集中力が低く、3 年間読み書きを習っても習得できませんでした。しかし、3 年 1 ヶ月たった頃、突然成績が上昇し、今では年齢どおり中学 2 年生（※）の学校に通える程に教育が追いつきました。要因として、カイラシュ君が劣等感を克服し、自信を取り戻したという精神的な変化が作用したことが考えられます。

＜感想＞

バル･アシュラムはかなり整った環境だと思いました。子どもたちの将来を見据えた教育がされているし、実際に社会に出て活躍している卒業生も多いなという印象でした。質疑応答での、「勉強に興味がわかない子にも教育を続けるべき」という考え方には共感できました。全教科でなくても、最低限の読み書きができるような識字教育は大切だと思います。

基本的な教育のみでなく、児童労働に対する知識や社会常識、また社会の現状について授業やディスカッションを行うことが、バル・アシュラムの子どもたちの自立性、児童労働やインド社会に対する意見を形成するための要素になっていると感じました。

※インドの教育制度

- Primary: 1～5年生（日本では、小学校に当たる）
- Upper Primary: 1～8年生（中学校）
- Secondary: 9～10年生（高等学校）
- Senior Secondary: 11～12年生（上級高等学校）
- Collage, University: 2～3年間（カレッジ、大学）

1～8年生が初等義務教育。また州や地域によって学年編成は異なる。

5) 子ども村議会の様子、子どもたちへのインタビュー

日時:2009 年 8 月 30 日、午後
場所:バル･アシュラムのミーティング･ルーム
面会者:子ども村議会メンバー、
　　バル･アシュラム代表メンバー
記録担当者: 石田恵理、並木祥子

＜子ども村議会のメンバーによるミーティング観察＞

毎週日曜日 15:30 から子ども村議会の定期ミーティングが行われます。この日の参加者は、バル･アシュラムの子ども村議会メンバー(約 10 人)と、「子どもにやさしい村」プロジェクトに参加している村の子ども村議会のメンバー(女の子 4 人、男の子 9 人)です。中には 20 km離れた村から参加する子どももいます。

毎週参加する村は異なるので、会議前に自己紹介が行われました。司会はバル･アシュラムのメンバーです。まず、『「子どもにやさしい村」プロジェクトとは何か』『子ども村議会がなぜ設立されたのか』の説明がありました。『プロジェクトは子どもたちが皆学校に行ける村にするため、自分たちで会議を開き、問題を自己解決できる村を作るための取り組み。子ども村議会はおとなと連携し、子どもの意見を聞いてもらうことができる。』その後、村での会議の開催頻度、前回開催された日、議題について、それぞれ村ごとに発表されました。主な問題は教師の質や、学校の設備についてでした。子ども村議会で議題としてあげ、さらに村の議会へ提示することで問題は改善されています。例えば、『以前あまり学校に来ない教師に対して、子どもたちがボイコットを行い、教師の欠勤がなくなった』そうです。

その後皆でスローガンを唱えました。子どもたちからスローガンは、「子どもが生まれながらに享受する教育の権利」を受けるため、また教育に対する人々や社会の認識を変えるために唱えるのだと説明がありました。さらに男女平等な教育について、『インドでは女性の地位が低く、食事でも何でも男の子が優先。男性と女性は、車の両輪のように動かなければならない。』と話してくれました。

＜バル･アシュラム代表メンバーへのインタビュー＞

Q. 教育の必要性について、村の人々に受け入れられないことはありますか？

A. 両親が「貧困のあまり子どもの学費などを捻出できない」という場合が多くあります。「教育を受けても仕事が見つからなければ意味がない」などと言い訳もします。親は「教育＝仕事を得ること」と考えていますが、そうではありません。教育は正しいことと誤っていることが認識できるようになること、自分達の権利のために闘う力をつけることです。

＜感想＞

教育は正しいことと誤っていることの判断ができるようになること、という子どもの言葉に驚かされました。村の子どもと比べると、バル･アシュラムの子は自己主張や積極性の面で秀でていると感じます。バル･アシュラムの子どもが地域のリーダーとなっていることで、他の村の子どもたちの刺激にもなり、模範となっていくと思います。日曜の会議にはそうした狙いもあるのだと感じました。

2-2 「子どもにやさしい村」プロジェクト

1）「子どもにやさしい村」 の人たちの話

日時：2009 年 8 月 31 日、午後
場所：バル・アシュラムのミーティング・ルーム
面会者：クンダラヤ村、チタウリ村、バマンバス村、スラジプラ村の人々
（活動家、女性グループ、青年グループ、子どもたち）
記録担当者：田中由紀子、奥山純、山崎真実

プロジェクトが実施された村の人々から、プロジェクトの実施前後の村の変化について話を聞きました。

＜クンダラヤ村、チタウリ村の住民へのインタビュー＞

クンダラヤ村では、以前は学校に毎日通わない子どもが多くいましたが、プロジェクト実施後は、子どもや親が教育の大切さを知り、子どもたちは学校に通うようになりました。また子ども村議会が、主に学校の給食や教室などの問題について月に 2 回のミーティングを開いて話し合っています。

チタウリ村にも、以前 50～60 人の児童労働者がいましたが、プロジェクト実施後、おとなも教育の大切さを知って、男子 12 人、女子 15 人の 27 人が新たに入学しました。この村でも、子ども村議会が月に 2 回ミーティングを開き、学校や村について話し合っています。村には今まで中学 2 年生までの学校しかありませんでしたが、高等学校ができたり、女子トイレや校庭ができたりしました。さらに女性グループができてから、女性たちが自分の意見が言えるようになり活動にも参加できるようになりました。

どちらの村もプロジェクトが始まる前は、考えが保守的で、何も変わらなくて良いと思っていたそうです。しかし、BBA のスタッフや活動家に説得され、教育の重要性なども理解することができました。

子ども村議会にとっての今後の課題は、クンダラヤ村では、おとなとの話し合いを持ち続けること、チタウリ村では、女子への教育の充実、女性が安全に出産できるよう保健センターに分娩室を作ることだそうです。

＜バマンバス村、スラジプラ村の住人へのインタビュー＞

バマンバス村の子ども村議会のメンバーによると、以前は多くの子どもがカーペット織りの仕事をしていましたが、プロジェクトによって働くのをやめ、学校に行くようになったそうです。また学校はそれまで小学 5 年生までしかありませんでしたが 8 年生まで勉強できるようになり、学校の数も 1 つ増えました。スラジプラ村でも、教員の数が増え、学校にホールができました。また、学校給食が食べられるようになり、女の子も学校に通うようになりました。

女性グループの方の話では、以前は教育の必要性や児童労働が悪いという認識がありませんでした。しかし、プロジェクトによって児童労働がなくなり、仕立ての職業訓練センターができたことで、今では近くの大都市から仕事をもらい収入も得ています。訓練センターでは、現在 12 人が訓練を受けています。

＜感想＞

多くの村人が、教育についての重要性や児童労働が悪いことだという認識がなかったことに驚きました。児童労働の原因は単に貧困で働かざるを得ないためではないと思いました。

2) 「子どもにやさしい村」プロジェクトを実施した村の訪問

～ティカリヤ村～

日時：2009 年 9 月 1 日、午前
場所：ラジャスタン州ティカリヤ村
　　情報センター、政府の学校、私立学校
面会者：アニールさん（活動家）
記録担当者：田中由紀子、母袋愛子

＜村の施設訪問と住人の話＞

ティカリヤ村を案内してくれたのは、村の活動家アニールさんでした。

村の情報センターには、中央政府、州、村での政策についての情報が壁に張り出されており、年金手当てや補助金などの情報を住民が知ることができるようにしています。ここでは 2、3 ヶ月前に村にトイレを作るための 500 ルピーを行政に申請し、その結果をずっと待っているところだそうです。

プロジェクトを実施する前は、村には児童労働者が 37 人いましたが、現在は全員が学校に通っています。働いていた 37 人のうち 30 人が女の子で、主に自宅でカーペットなどを作って働いていたそうです。

村にある政府の学校と私立学校は共に小・中学校 1～8 年生までしかなく、高校に進級したい場合は 1.5 キロ先の学校に通わなければなりません。政府の学校には 7 つの教室がありますが、教室が足りないため、木の下で勉強している子どもたちもいました。一方、私立学校には、生徒が 200 人、教師が 8 人おり、教師が 1 人 1 クラスを受け持って授業を行っています。私立学校に子どもが通うには毎月 100 ルピーの学費を払わなければなりません。（政府の学校は無料。）

この村で子ども村議会の副議長をしているハンスラージ・ジンドリア君（18 歳）の話によると、これまでの子ども村議会の活動によって、学校に正門や井戸ができたりしました。現在は、教師の数が少ないという問題に取り組んでいるそうです。

＜感想＞

学校の教室が思ったよりも暗かったことに驚きました。また、私立学校では、出歩く子どもたちもなく、真面目に授業を聞いていたのに対し、政府の学校では、私たちを見に来ている生徒がいて、授業中なのに良いのかなと思いました。

※1 ルピー＝約 2 円（訪問当時）

～ジャイシンプラ村～

日時:2009 年 9 月 1 日、午前
場所:ラジャスタン州ジャイシンプラ村
　　情報センター、私立学校
面会者:コーディネーター、私立学校校長
記録担当者:田柳優子、竹内悠

＜村の施設訪問と住人の話＞

バル･アシュラムを出発し、チタウリ村を通過して自然に囲まれたでこぼこ道を車で走っていくとジャイシンプラ村に着きました。

村の情報センターは、活動家が 1 日 1 回来て政府の政策を村人に伝える場や、青年グループの会議の場として使われています。壁には、青年グループ、女性グループ、子ども村議会のメンバー表などが貼ってあります。村人たちはここで政府の政策や BBA の活動について情報を得ることができます。

活動家は特定の村を担当し、どの日に何をするという計画に沿って活動します。また地域のコーディネーターもおり、活動家が記録する日誌を見て、活動家の仕事の確認や調整する役割を持っています。活動家と政府の役人の話し合いがうまくいかない時にも、コーディネーターが仲介役として働きます。これまでの活動成果としては、高齢者が年金を受け取れるようになったこと、女性が給付金 1500 ルピー/年を受けとれるスマートカードを配布されたこと、砂利道の舗装、村の人口や年齢分布などのデータ収集(年 1 回)、住民票作成などがあります。

見学した私立学校の生徒 400 人のうち 15 人はかつて労働をしていた子どもでした。BBA が救出して、青年グループに所属する校長に依頼し、学校に無償で通わせてもらえることになったそうです。校長は村人に女の子への教育の重要性を呼びかけ、150 人の女の子を学校へ通わせることに成功しています。卒業率 100%を誇りますが、村はいまだ保守的で、高校を卒業するとすぐ結婚してしまう女の子が多いそうです。村にある学校は、私立 2 校と公立 1 校で、大学は村から 15 キロ離れており、進学率は 1 割でした。

学校敷地内にある幼稚園は 2 年間のクラスがあり、5 年前は 10～15 人、今年は 30～40 人で男女比は 1:1 でした。

＜感想＞

子どもたちがみんな笑顔で迎えてくれたこと、就学率は学年が下がるほど高くなっていることに村の未来の明るさを感じました。

～チョタカークラーナー村～

日時：2009 年 9 月 1 日、午前
場所：ラジャスタン州チョタカークラーナー村
　　政府の小学校、情報センター
面会者：政府の学校の教師、調理師
記録担当者：奥山純、中本映子

＜村の施設訪問と住人の話＞

村に到着するとラクダや牛などの家畜を多く見ることができました。村の人口は 450 人、世帯数は 60 世帯で、そのうち 90%は農家です。農業の主な作物は小麦、トウモロコシ、豆です。また、2007 年 4 月より政府が村の失業者に対して道路や井戸の工事などの公共事業の仕事を与える政策を行っています。この政策によって、村人は必ず 100 日間仕事を与えられ、給料（日給 80～100 ルピー）が月 2 回支払われます。毎月村から 40 人、男女問わず家族から1人雇われます。村の人の月収は1家族あたり 1500～1800 ルピーくらいだそうです。

村には政府の学校があり、小学 1～5 年生が英語、ヒンディ語、算数、科学、社会を勉強しています。生徒数は 46 人で先生は 1 人です。最近までもう 1 人先生がいたそうですが、定年退職してしまったそうです。学校は小さく、教室として授業に使われているスペースは 2 つのみです。その 2 つのうち、屋内の教室は 1 つで、もう 1 つは半分屋外に面した屋根があるだけのスペースです。生徒の教科書や文具は、すべて地域の教育局から学校を通して支給されます。貧困層の子どもは制服とバッグを買うためのお金も支給されます。

また学校には調理場があり、そこで給食が作られ、子どもたちに配られます。以前は給食が毎日作られていませんでしたが、プロジェクトが実施されてから子ども村議会が村の行政に申し立てて、やっと毎日作られるようになったそうです。ちなみに、献立はパンやご飯、豆粥など、毎日違うものが作られています。食費は政府から出ており、調理師の労費として子ども 1 人につき 1 日 2.08 ルピーが支払われます。その労費が 5 ヶ月間調理師に払われなかったことがあったときは、学校の先生が村の行政に要請して支払われたそうです。

＜質疑応答＞

Q. 村にまだ学校に通ってない子どもはどれくらいいますか？

A.　10 人くらい。先生が増えれば行きたいという子どももいます。
　　（子ども村議会副議長　ナルシーさん 9 歳）

＜感想＞

実際に村に行ってみて、村に住んでいる人や学校を見ることができた。学校は想像していたものより狭く、簡素なものだった。また、学校に先生がいないという事実にも大変驚かされた。逆に、村の人、特に子どもの教育に対する意識の高さにも驚いた。学校に通っている子どもがそうでない子どもに「学校に来ない？」と声をかけるなど、子どもが子どものために活動していることも知ることができた。

2-3　バタフライズ

日時:2009 年 9 月 2 日、午前
場所:バタフライズ事務所
面会者:ザーウェドさん(コーディネーター)
記録担当者:根本泰良、毛利聡子

＜バタフライズのスタッフの話＞

バタフライズの活動の特徴は、施設を設けずに、スタッフが路上、公園、バスターミナルで生活し、働いている子どもたちの現場に行き、子どもたちを救い出すことです。施設を設けても子どもの働く現状を改善することができないと考え、設けていないのだそうです。子どもの困難な場所に入ることがバタフライズの特徴です。

活動内容は多岐にわたります。路上の子どもたちと話し、編入試験を受ければ入学することができると助言したり、チャイルド・ラインと呼ばれる 24 時間体制のコールセンターや子どもたちの状況を確認するための夜回りをしたり(月 2 回)、カウンセリング、健康管理、ナイトシェルター(子どもたちが夜すごす場所)の開設などの活動をしています。中でも 2008 年から始まった"Chalta Firta School"と呼ばれるモバイル・スクールはとても面白い教育手法です。これは、デリー市と連携して実施している教育プログラムで、スラム街や建設現場で働く人の子どもたちを対象に、算数や英語のほかに、ドラッグに関する教育や貯金のことなど、生活する上で必要な知識も教えています。現在、2 台のモバイル・スクールが、一日に 3 ヶ所回り、1 ヶ所で約 40 人の子どもが学んでいます。半年から 1 年間勉強すると正規の教育プログラムに入ることができるという仕組みです。

これらのプロジェクトはすべて 1 つにつながっています。しかし、デリーだけでも約 40 万人のストリートチルドレンがいるため、全員を見ることはできません。バタフライズは子どもたちの問題をより多くの人々に知ってもらうために子どもによるラジオや新聞などで呼びかけたり、政府への提言活動にも力を入れたりしています。その他、警察官が子どもたちを殴るなど虐待するケースが多いため、警察官に対するトレーニングも行っています。

＜質疑応答＞

Q. 子どもたちに路上で話しかけても、心を開いてもらうのは難しいのではないですか？

A. 何回も足を運んで話しているうちにだんだんと子どもたちは心を開いてくれます。

＜感想＞

子どもたちの中には心に傷を負っている子もいて、現場に行くことは私たちが考えている以上に過酷でした。やはり警察官が問題であると思いました。警察官が子どもたちに暴力を振るうインドの現状を聞いて、市民を守ってくれる役割の人たちが問題を逆に増やしていて残念に思いました。

2-4　タラ・プロジェクト

日時:2009 年 9 月 2 日、午後
場所:デリー　タラ・プロジェクト施設
面会者:シャイアム・シャルマ教授、
　　ムーン・シャルマさん、カイラシュ・ジョシさん
記録担当者:伴野保志、中本映子

＜タラ・プロジェクトについて-ムーン・シャルマさんから＞

タラ・プロジェクトは、経済的に不利な状況に置かれる職人の自立を支援するために 1970 年代から活動を始めたフェアトレード団体です。インドはカースト制度が根強く残っているため、社会進出するのが難しい社会の底辺層の人々を支援し、皆が平等な機会を享受できるよう活動しています。

現在タラ・プロジェクトには、35 の生産グループ、13 種類の商品、1000 人の工芸品を作る人、33 のパートナーがおり、職業訓練、生産、販売、そしてフェアトレートの促進などを実施しています。

工芸品を作るグループはインド各地にあります。材料も社会的責任を持つ調達先から購入しています。また、生産者の健康も重要視しており、約 600 人の生産者が健康保険に入っています。

また、子どもの権利を重視し、フェアトレードを通して児童労働根絶を目指す活動もしています。市場ではコスト競争によって、より労働賃金が安い子どもたちを雇っている現実があります。例えば、おとなでは 5000 ルピーもらえる仕事を、子どもは 1000 ルピーで働いています。働いても見合った収入が得られず貧困から抜け出せないというケースがあるのです。

この問題を解決するためにも、消費者として「児童労働によって作られた商品は買わない」という意思表示が重要です。また消費者がフェアトレード商品かどうかをお店の人に確認し、消費者が意識している、ということをメッセージとして伝えることが重要です。

＜最後に－シャイアム・シャルマ教授から＞

児童労働を減らすために力を貸してください。製品が児童労働ではないことを確認してから買ってください。小売り、仲買い、卸売りなどそれぞれの場で、メッセージを発信してほしいと思います。どうしたら解るか(と問いかけること)、それがスタートです。

よく児童労働の原因に経済的な貧しさが挙げられますが、みなさんは「貧困」と「児童労働」どちらが先にあると思いますか。私は児童労働が存在することによって、その家庭や国がますます貧困になる、と考えています。

＜感想＞

まず身近なところから、「これはフェアトレード商品だろうか」と意識することが第一歩なんだと感じました。そうやって見渡してみると、最近「フェアトレード」と書かれている商品が目につくようになりました。これからも意識することを続けていこうと思います。

2-5 ILO（国際労働機関）南アジア地域事務所

日時：2009 年 9 月 4 日、午前
場所：ILO 南アジア地域事務所
面会者：シェリーン・カーンさん(シニア・スペシャリスト)
記録担当者：並木祥子、竹内悠

＜ディーセントワークとインドの児童労働への取り組み＞

ILO 南アジア地域事務所がある建物の敷地内には、‘exploitation to education’（搾取から教育へ)という標語が掲げられた子どもの像（右上の写真）がありました。今回は、主に ILO によるディーセントワークと児童労働に対する取り組みについてお話を伺いました。

ILO（国際労働機関）は 1919 年に設立された、加盟国の政府・労働者・使用者の代表で構成される労働に関する国際的な専門機関です。ディーセントワークとは ILO の世界的使命であり、人々によりよい仕事を与えること、男女双方への社会的保護や労働者の権利保護などが含まれています。インド国内のプログラムとしては、①ILO が政府の政策・戦略作りを手助けすることによる、よりよい雇用機会の創出、②社会保障、安全保障などのツール開発、③家族や地域をベースとした社会的弱者の受益者を増やすための政策の実施などがあります。

ILO の児童労働に関する取り組みで中心となるのが IPEC(児童労働撤廃国際計画)です。インドでは 1992 年にこのプログラムが開始され、これまでの成果と評価をもとに活動が続いています。政府の児童労働プロジェクトや教育プロジェクトとも連携をはかり、意識啓発、計画策定、調査などを行っています。

児童労働をなくすためには、1つの省だけ、ILO だけで取り組むのではなく、相互に連携しあって取り組むべきです。現在の優先課題は家事使用人や農業部門での労働です。そういった労働環境から子どもを解放するだけではなく持続的なリハビリテーションが必要なため、子どもの家族まで焦点を当て政府の制度を生かした取り組みを進めていく見通しです。

＜質疑応答＞

Q. 政府のスキームをどのように使っているのですか？またそれは満足なものですか？

A. インドには十分なスキームがありますが、実際に重要なのはその実施とそこへのアクセスです。スキームの存在と申請方法を人々に知らせるのが課題です。

Q. スタッフの 88%が現場にいるということですが、どのように活動を強化しているのですか？

A. IPEC の活動では地域スタッフのトレーニングが重要です。実施する立場にある人を計画段階から参加させることでより実現性を高めています。

＜感想＞

ILO のような大きな機関でも、単体で児童労働という問題を解決できるのではなく、様々な立場の人々との連携があってはじめてプロジェクトが成り立つのだということがわかりました。やはり問題に取り組む上での啓発活動なども、重要な役割なのだと実感しました。

2-6　NIFAA（全国芸術家・活動家統合フォーラム）

日時：2009年9月4日 、午前
場所：YMCA
面会者：シン・パヌ代表、若者メンバー（男女6名）
記録担当者：川俣真理絵

＜NIFAAの活動＞

NIFAAでは、アーティストや活動家が路上で児童労働の認識を高めたり、セミナーやディスカッションを行ったりしています。また、村に行って、子どもたちが学校へ行くよう呼び掛けたりもしていて、それが就学率の向上を促しています。私たちはここで、インドの富裕層や若い人たちが自分の国の児童労働についてどのように考えているか知るために、NIFAAの方々にいくつかの質問をしました。

＜質疑応答＞

Q. なぜ児童労働は起こってしまうと思いますか？
A. インドには多くの貧困層がおり、家族が貧しい場合、その子どもは家族のためにも働かなくてはならないという状況があるからだと思います。
Q. 政府の取り組み以外で、児童労働の問題を解決する方法は何だと思いますか？
A. 貧困の解決に必要なのは、全員に教育を受けさせることだと思います。貧困は全ての問題のもとです。インドではまだ無償義務教育が全国で実施されていません。また、企業が安い労働力として子どもを搾取しています。企業単位での児童労働廃止計画を実施するべきだと思います。また、政府に求めることは、高校までの教育を無料にすること、貧しい子どもへの食料の支給、カースト制度の見直し、小学校からの人権教育などがあります。
Q. 一般の学校では、児童労働について勉強しますか？
A. 詳しくは勉強しません。授業では8年生で初めて貧困などの社会問題について学びます。インドでは子どもがお手伝いさんのようなことをするのが当たり前で、これが児童労働だと気づかない人も多いです。
Q. インドの子どもたちは、自分の持つ権利について知っていますか？
A. 意識は少ないだろうし、情報も少なく、大部分が知らないでしょう。

＜感想＞

農業をしている家庭では、天候によって農作物が育たなかったりした場合、生活ができなくて自殺してしまう家庭もあるそうです。それを避けるためにも、子どもが労働させられています。そこまで配慮した上での政策を行ってほしいと思いました。児童労働はインドだけの問題ではないと言っている人がいましたが、確かにその通りだと思います。しかし、やはりインドは、一番この問題と向き合うべきだと思います。ちゃんと教育を受けられている子どもにも、自国の現実と子どもの権利について、しっかり学んでほしいと思いました。

3. 参加者による帰国後の活動

帰国後は、ツアー参加者による様々な活動が行われました。その一部をご紹介します。

●ACE 主催スタディツアー報告会の実施

2009 年 10 月 24 日に、一般の方を対象にしたスタディツアーの報告会を実施しました。ACE スタッフやツアー参加者が訪問場所についての概要や、そこで見たもの、自分が感じたことなどをパワーポイントで写真を交えて発表しました。そのあと、ツアー参加者と一般の方が一緒に 4～5 人のグループになって、説明の中でわからなかったことやもっと知りたいことを話し合う時間もありました。インドの紅茶チャイを飲みながら少人数で話をすることで、より詳しくツアーやインドの児童労働について知っていただけたのではないかと思います。また、私たち参加者も、他の人に「伝える」ということを通して、改めて児童労働やその取り組み、自分にできることについて、自身の問題として考えを深めることができました。今後も、考え、伝え続けることで、児童労働という問題に取り組む仲間の輪を広げられたらと思います。（並木祥子）

スタディツアー報告会の様子

福岡でのイベントにブース参加

●福岡での学習会開催とグループ立ち上げ

ACEの活動が東京に集中していて、お手伝いができず、九州での活動を模索しておりました。しかし、2008 年 11 月 20 日に第1回目の講演会を「人権を考えるキリスト者の会」の主催でACEの岩附由香代表を迎え開催いたしました。キリスト教関係の団体や福岡NGOネットワーク（FUNN）の協力をいただきながら、20名程の参加者を得られました。昨年に続き「人権を考えるキリスト者の会」のご厚意で、今年も児童労働をテーマにしていただき、10月9日に白木朋子事務局長を迎え第2回目の講演会を開くことができました。今回は2回目ということもあり、告知など、きめ細かくすることができ、40名余の参加者が得られました。翌10日～11日には国際交流協会主催の「地球市民どんたく」へのブース出展も実施いたしました。9日の講演会と10日～11日の活動を通し、幅広くACEの活動を知らせることができました。また九州の地で児童労働や国際支援に関心を持つ、仲間と知り合うことができ、来る11月23日には、白木さんを交え、スタツア報告会を兼ね、ACE福岡グループの立ち上げをしたいと計画しております。「地球市民どんたく」には、遠く和歌山よりちーねーちゃんこと辻本氏も馳せ参じて下さり、ACEへの熱い思いを強く感じました。やっと九州でACEの活動の準備ができました。この思いを世界中に届けられれば幸いです。引き続き皆様のご支援とご指導をお願いいたします。（岩城嗣郎）

●明星大学　フィールドワーク報告会での発表

私たちは、11 月 17、18 日に大学内でフィールドワーク報告会を行いました。私たちは、この報告会ではインドのスタディツアーを通して感じたこと、伝えたいこと、どんな事をしてきたのかをパワーポイントと模造紙にまとめ、発表しました。パワーポイントでの発表では、児童労働とは何か、児童労働と子どもの仕事の違い、バル･アシュラム、バタフライズ、タラ･プロジェクト、私たちにもできることについて説明しました、児童労働の現状として、実際の働く子どもたちの数や職種、移動スクールについて、フェアトレード商品とは何かを模造紙に書いて説明しました。

発表では、バル･アシュラムとフェアトレードを特に力を入れました。バル･アシュラムは児童労働から救出された子どもたちのリハビリ施設だけれど、子どもたちは明るく前向きで子どもらしかったということや、私たちがバル･アシュラムで聞いた児童労働の話、子ども議会での様子を動画で映しながら説明しました。フェアトレードに関しては、フェアトレード商品と児童労働の関係性を説明し、私たちがフェアトレード商品を買うことが、児童労働を減らすことに繋がるということを説明しました。

今回の発表は、学科内の 1 年生に向けて行ったのですが、インドの子どもたちの教育に対する考えや、インドに児童労働者として働いている子どもたちがいることに驚いていました。中には、「フェアトレード商品に興味を持った」「これからはフェアトレード商品を探して買おうと思った」「児童労働を無くすために自分も行動を起こしてみたいと思った」などの感想もありました。

時間が少なく、私たちが伝えたかった全てを伝えることは出来なかったと思います。しかし、児童労働について知らなかった人に児童労働について知ってもらい、私たちにも減らすために出来ることがあるということを知ってもらえたと思います。これからも学校内、外に関わらず、私たちにできることを続けていきたいと思います。

（田中由紀子）

4. 参加者の感想

旅から帰って、おもうこと

石田　恵理（会社員）

学生時代に初めて貧困の現場を見て以来自分に何ができるのか考えてきました。参加前、おぼろげながら浮かんでいた答えは『おもいを行動に示すこと』。ツアーでの見聞を通して、その答えはより確実なものとなりました。自分で考えた末の行動、その結果はどうであれ、考えたことに意義がある。思えばこれは、日本で社会生活を送るうえでも欠かせないことなのでした。また、現場を見る、携わる人々の話を聞く、そして児童労働を経験している子どもたちと触れ合う。これらのプロセスを経て、学びはより深いものになったと感じています。

一番印象深かったのはやはりバル･アシュラムで出会った子どもたち。複雑なバックグラウンドを感じさせない程、彼らは自信に満ち溢れていました。享受されるべき権利や教育の重要性について理解し、意見をおとなの前でも説得力を持って述べることができる。児童労働の過去さえもプラスに変えうる自信を供えている彼らは、アシュラム出身ということをとても誇りにしている、とのことでした。施設の見学やスタッフの方々の熱い思いを聞かせていただくだけでなく子どもたちと触れ合い、児童労働についての考えや夢など、色々な話を聞くことができました。『家族で出稼ぎをしてたから学校には行けなかったけれど。家族のことを恨んではいない。職人になって稼げるようになったら、仕送りをしたい。』そう話してくれた男の子。どんな形であれ、子どもたちの未来を支えるお手伝いをしてゆきたいとの思いを新たにしました。その他にも、プロジェクトが行われている村や ILO を訪れたり。現場とトップの視察により、ILO での（私にとって）難しい話も、一部ではありますが実感を伴って理解することができました。インドの路上で物乞いをする子、タージマハールにいる裕福そうなインド人、ガンジーの墓誌に集まる人々。。。。

このような素晴らしい機会を提供してくださった由香さんはじめ、ACE のスタッフの方に改めて感謝しております。児童労働問題に対する情熱や思い入れだけでなく、お仕事に対する姿勢を垣間見、まだまだ未熟な社会人の私にとって勉強になることばかりでした。今回の旅で得た答え、思いを行動にうつすこと。ACE の活動をより沢山の人に知らせるために。そうすることで、私の毎日もより充実していくことを確信しています。

～見て･聞いて･感じて～

岩城　嗣郎

知りたかったこと

インドは今回で 2 回目の訪問です。一回目は 2007 年、現地に足を運びこの目でインドの国を見てみたいとの思いで訪問しました。同時に ACE、言い換えれば私たちの活動と児童労働の子どもたちとの具体的な関連を知りたかったのです。BBA の施設、「子どもにやさしい村」の訪問、スタッフや村の子どもたちの話を聞いて、彼ら、彼女たちの環境や生活に変化が起きていることは理解できても、それがどんな関わり方をしているのかが理解できませんでした。まだ充分とはいえませんが、今回の訪問で、そこのところが少し見えた気がいたします。ACE は現地の NGO と組んでプロジェクトを推進し、物資または財政的援助を提供、御互いの目標とする事柄を話し合いながら、ことを進め、ACE はモニタリングという手法を以って、進み具合を確かめ両者が話し合いながらさらに今後の課題等について自らの目指す目標を達成する。･･･ACE のスタッフは違ったらご指摘願いたいのですが･･･。このことはツアー中、成田さんが事細かく変革の様子など質問している様子と岩附氏からの説明によって知りました。モニタリングの内容はひとつひとつ記憶しておりませんが、出来ればその詳細のいくつかを具体的に知りたいです。

1）「子どもにやさしい村」プロジェクト･･･自らのことは自らの活動から･･･

まず、支援が物的なものではなく、意識の変革から進められ、意識の改革とともに、社会環境や施設の建設などが、当事者自身の活動によって行われておりました。インドには、国あるいは州、村が子どもたちの教育を授ける法律があります。しかし、その法律が実行されずにいることに対して、活動家たちは、そのための運動の方法や情報提供を通して、住民自らが学校の建設や先生の確保など子どもたちの教育環境を作っておりました。これは日本においても福祉政策があるにもかかわらず、活用しきれずにいる人がいかに多いことか、野宿者支援の現場からも痛感するところです。自国の法律を生かして環境改善を実行することは、当事者の意識改革なくして出来ないのは当然であり、まず当事者自らが行動を起こすことが、現地活動家の基本であることを知りました。

2）バル･アシュラムの人つくり･･･誕生日のお祝いから･･･

児童労働という、人が人として扱われていない環境から開放された子どもたちが、バル･アシュラムの施設で真の意味の人間回復が行われているのを、誕生日のお祝いを通して見ることが出来ました。5～6 人ぐらいだったでしょうか？炉に薪を焚いた火を囲み、カイラシュ夫人が一人一人の子どもに祝福の祈りをささげ、人としての大切さ(子どもたちは、尊重されなければならない大切な人であること)を説いておりました。ある方から教育とは「人間が人間を人間らしくなるための御手伝いをしていくこと」と聞きました。まさに真の教育が行われていると感激いたしました。さらに、一人ではなく多くの仲間がいること、自分だけでなく御互いが思い合いながら生活していく大切さを説いていました。ある子どもが、ここはとっても楽しいと話してくれたことが何よりの証ではないでしょうか。

3） バタフライズ・・・それぞれの活動方法・・・

スラム街や町の中の何箇所かにバスを走らせて、モバイルスクールを開いている団体のスタッフから話を聞いた後、現場を訪問いたしました。メンバーは街中の子どもたちに語りかけ、色々な援助活動をしておりますが、児童に対する支援の方法は BBA とは、また違ったものでした。一般的な社会生活をおくっている子どもと（たとえそれが児童労働といった特殊な環境にあったとしても）ストリートチルドレンといった野宿生活をしている子どもとの生活習慣は著しく異なることは容易に想像がつきます。どのように子どもたちに接触するのかという質問に、「何回も足を運びながら顔なじみになっていくことです」との答えでありました。しかし顔なじみになったところで、あるいは施設につれて行くことが出来たとしても、長い間体に染み付いた野宿生活の習慣は簡単に改善できるものではないでしょうし、保護や収容後のリハビリは更なる忍耐がいるだろうと推察しました。この辺をもう少し突っ込んで聞いてみたいと思いました。しかしスラム街でのモバイルスクールを訪れたとき、幼い子どもたちが学んでいる姿に感動しました。「子どもにやさしい村」の学校でも同様ですが、子どもたちは学校に来て勉強をすることを喜んでいました。本来子どもは学ぶことが大好きとは聞いておりましたが、インドの子どもたちにその姿をみました。今、日本の学校は非常に荒廃しております。勉学についていけない生徒の授業妨害や、学校の規律を守れない生徒の学校側の締め出し等々があります。インドの子どもたちがこんなに学校を喜んでいる姿を見て、日本の私たちが何か学ぶべきものがあるのではと考えざるを得ませんでした。

4） 感動そして次のステップへ

いくつかの施設訪問と、そこでの活動の見聞は、私にとって多くの、そして大きな感動を与えてくれました。前回訪問した村の子どもたちの足元は、私が子どもの頃（終戦後）はいていたようなゴムぞうり、中には裸足の子も。しかしその満面の笑顔と澄み切った彼女、彼らの瞳に接したとき、その美しさに涙が出るほどの感動を覚えました。貧しさと心の豊かさは違うのかな～？と思いました。今回もその笑顔が見たくてインドを訪れ、期待は外れませんでした。子どもばかりではありません。村では人なつっこい人柄に触れることが出来ました。村人の写真を撮った後、家の中の写真まで快く撮らせてもらいました。日本の豊かな生活とは遥かに遠い貧しさの中にあって、私たちがすでに失っているものが、厳然と残っているように思いました。決してインドの貧しさが良いとは言いません、しかし日本の失ってしまっているものが何か？どうしてか？は、もう一度彼らから学ぶ必要はないのでしょうか？出来ることなら何回でもインドに足を運びたいと思っています。

そして・・・、夢と幻をこれからの人生の中で持って生きたいと思います。それは福岡の地で、行動を起こすことです。児童労働の講演会は、昨年 ACE の岩附さんの講師で、第一回目を開きましたが継続的に出来るか心配でした。今年は、白木さんを迎え、第 2 回目を開催し、確かな手ごたえを感じました。また「地球市民どんたく」世界貢献のイベントでブースの展示をし、仲間もできました。まだ福岡では ACE の活動がやっとヨチヨチ歩きを始めたばかりですが、更なる発展をめざして行きたいと思います。会員の獲得、思いを同じくするサポーターの募集、そしてその仲間たちと今後の計画を考えていくつもりです。10 月の催しに続き 11 月には白木さんが再度講師を勤める NGO カレッジも予定されています、この機会に来期の計画を具体的に進めて行きたいと思っています。福岡でこんなことが可能になったのは、ACE の今までの活動が九州まで知られており、高い評価を得ていることが大きな要因です。今後 ACE の働きが全国に広がることを願っております。

最後になりますが、2 回のスタツア参加で多くの若者に接することができました、皆さん真摯に物事を考え取り組んでいることを見せていただきました。これはわたしにとっての大きな感動のひとつです。皆さんに心からの感謝をささげつつ、以上インドスタツア報告といたします。

感想文

岩附　加代子（社会人）

見学した場所のバリエーションが豊富ですし、企画もすばらしかったと思います。バル･アシュラムの訪問は日曜日が初日でしたので、まず、一緒に遊ぶ事から始まったのが、子どもたちの心をほぐす効果がありました。

ただ、3 日間の滞在は、訪問する側も、子どもたちにも少し負担がかかった印象があります。2 日間で充分と思います。予定より時間が延びる事は、ある意味プラスの兆候でもありますが、子どもたちの年齢を考えると、企画は伸びても、夜 8 時には終了した方が無難でしょう。

どんなに良い企画も、お腹いっぱいにせず、八分目の方が効果が高い場合もあるのではないでしょうか？

個人的には、自律神経失調気味な期間とツアーが重なって、スタッフに厳しい意見を申し上げたと反省しております。 ACEに居ない熟年の意見も、参考にしていただければと思いました。

インドで見たもの

奥山　純（大学生）

今回のインドのスタディツアーが私にとって初の海外旅行でした。初日、空港からデリー市内のホテルに向かうバスの窓から見た景色は、牛と車が平行していたり、クラクションがそこかしこで鳴っていたり、日本とはまったく違うもので驚きました。しかし、このバスの中から見た景色の衝撃は、これから体験することに比べたら、たいしたことがありませんでした。

バスから降りるとすぐ、物乞いをする人たちが近寄ってきました。物乞いや、もの売りをする人にはデリーやアグラでは毎日何回も会いました。また、そのほとんどが子どもだったことが非常に衝撃的でした。ホテルから、バタフライズの事務所に向かうとき、幼い3人の姉弟が道路の中央分離帯で芸をやっているのを見ました。一番年上と思われる女の子が太鼓をたたいて、顔にピエロのようなペイントをした弟たちが、太鼓に合わせてバック転をしたり、肩の骨をはずして腕を回していたり、その必死な光景は強烈で痛々しかったです。

同じように、デリーのマーケットでも自分で描いた絵を売る少年がずっと私についてきました。ACE のスタッフさんから、「物乞いや物売りにお金やものをあげることは、その場の解決にしかならないため、必ずしも適切というわけではない」と聞いていたので、私は絵を買ってあげないでいました。すると彼は私に「お腹が空いた。10ルピー、10ルピーあれば僕はチャパティが買える。お願い。」と泣きそうな顔で言いました。私は結局買ってあげませんでした。しかし、あの時やはり買って上げればよかったのかな、と今少し考えます。

バル･アシュラムでは、インドの子どものいろんな側面を見ることができました。バル･アシュラムでは毎週日曜日に運動会（＝オリンピック）をしていて、私たちもそれに参加しました。このときの子どもたちの楽しそうな顔は非常に無邪気で子どもらしいと思いましが、ふと、この子たちが過去に児童労働をさせられていたことを考えたら、複雑な気落ちになりました。しかし、バル･アシュラムでの、子どもが子どもらしさを取り戻す活動はすばらしいと思いました。

それから、子ども村議会の子どもたちの自主性には驚かされました。子どもが「教育を受ける権利」と自覚していることと、その自分たちの権利を主張するために話し合っていたことに感心させられました。また、これは村の話ですが、学校に行っている子どもが行っていない子どもに声をかけるなど、子どもが子どものために活動していることに、意欲の高さを感じることができました。

今回のツアーで BBA やバタフライズ、タラプロジェクトなどの団体を見ることができました。その団体はどれも児童労働をなくそうという目的は同じなのに、それぞれのやり方があることに非常に感心し、できることはたくさんあるのだと思いました。

インドで学んだこと

川俣　真理絵（大学生）

私は、今回のツアーに参加してインドの児童労働の現状を実際に見たり聞いたりして、現地にいなくても自分にできることを見つけたいと思いました。

子どもたちから実際に物乞いを受けたときはとてもショックだったし、バル･アシュラムの子どもたち対してもどう接したらいいのだろうかと、アシュラムに着くまでの間、それからの一週間が不安になっていました。

でもバル･アシュラムに着いて、子どもたちの声を聞いた瞬間に不安はなくなりました。一緒にオリンピック（＝運動会）やいろんな遊びをして、子どもたちはすぐ懐いてくれたしずっと笑顔で、本当に楽しかったです。バル･アシュラムの子どもたちは「自分たちには勉強する権利がある」と言っていて、勉強することを望んでいたし、楽しんでいました。日本では、仕方なく勉強している感じだし、そういったことからインドの子どもたちに日本の授業風景を見せられないと思いました。私もそうかもしれませんが、勉強できるとても良い環境が与えられているのにやろうとしないことを恥ずかしく思いました。

今回のツアーでいろいろな支援団体を見せてもらいましたが、一番印象的だったのはモバイルスクールでした。学校へ行けない子どもたちがいるなら学校を持っていこう！という考えにとても感動しました。そこから正規の学校へ行く子どもがたくさんいるというのを聞いて、本当にすごいプロジェクトだと思いました。

また、子どもたちは支援を受けるだけでなく、子ども議会を開いたり、社会のことをものすごく考えていて、彼らのような子どもたちがおとなになれば、児童労働はいつかなくなるのではないかと思いました。

私は、子どもは学校に行ったり遊んだりしてれば良くて、働くことなんて考えることはないと思っていました。でも実際行ってみて、まったく仕事を取り上げることが良いわけではないと言う人たちもいて、わからなくなったこともありました。でもとにかく、子どもにとってまず大事なのは、勉強と遊びだと思います。アシュラムの子どもたちのキラキラした目が忘れられません。まだそんなに昔ではない辛い過去を、会ったばかりの私たちに話してくれた気持ちを絶対に無駄にしないためにも、今回の体験を多くの人に伝えます。支援団体の活動ももちろんですが、子どもたち自身の取り組みや考えも、特にインドで出会った子どもたちと同じくらいの日本の子どもたちに伝えたいと思います。

ツアー感想

櫻井　優樹（大学生）

今回のスタディツアーは本当に充実したものとなった。参加したきっかけは、昨年アフリカに行った際に現地の子どもたちと触れ合ったことである。彼らとの遊びや会話を通してコミュニケーションをとることができた。今回の旅でも、環境は違えど子どもたちとコミュニケーションをとることができるのか、また旅の目的である児童労働について理解を深めたいと思い参加した。このスタディツアーに参加するまでは児童労働に関してほとんど何も知らなかった。もはやインドは途上国ではなく先進国と呼んでもいいくらいだとさえ思っていた。

この旅で一番印象に残ったのは、何といってもバル･アシュラムでの体験である。バル･アシュラムでは児童労働から解放された子どもたちが暮らしている。彼らは本当にいきいきしていて、児童労働をさせられていたようには見えなかった。そしてみんな「学ぶ」ことにとても貪欲で、将来の夢もはっきりしている。感心させられてばかりだった。中でも、ある男の子が言っていた「教育は、自分たちの権利を主張するためのもの」という言葉に衝撃を受けた。私が彼と同じ年齢のころにこんな考え方はできなかった。むしろ今現在の私でも考え付かない。食べ物も服も十分すぎるほどあって、学校に行くことも当たり前という恵まれた環境にいる日本人。高校でも大学でも、なんとなく学校に行くという人が多い。一日一日を大切にしているアシュラムの子どもたちからは、強い生命感のようなものを感じることができた。また子ども村議会という組織があることにも驚いた。はじめは中学校などの生徒会のようなものだと思っていたが、子どもたちが自分たちの村のために自分たちで行動する姿勢が見られ、それがおとなたちをも動かし社会に影響を与えている。本当にすごいことだと思った。

バル･アシュラムという施設がどれだけ子どもたちの将来の支えになっているか、日本からの支援もあるという話を聞いた。まだまだ貧困の差が激しいインドにおいて、将来を担う子どもたちのために施設があるのだとしたらいいことである。逆に児童労働が限り施設が必要だと言うなら施設が必要でなくなること、つまり社会が変わらなければいけないのではないか、と考えさせられた。今回の旅を通して、児童労働の現状や子どもたちとの触れ合いができたこと、みんなに感謝したい。

インドの子どもたちと出会って

嶌津　風花（大学生）

私が、今回ACEのスタディツアーに参加した目的は、インドの児童労働の実態を知ることでした。それまで私は、授業で何カ国かの児童労働について学び、調べ、実際に起こった例もいくつか知って、知識と共に心の準備も万全のつもりで臨みました。しかし実際に目にするインドは、私の知識と想像をはるかに超えたものであり、たった1つの経験や話からでもたくさんのもの受け取り、学ぶことができました。

私たちは行く先々でたくさんの子どもたちと出会いました。New Delhi のホテルから出たときに駆け寄ってきた物乞いの少女達、つらい過去を背負いながらも未来のために精一杯今を生きるアシュラムの子どもたち、おとなを叱り教育の権利を訴える強い志を持った子ども達、学校の登下校途中に楽しそうに川で遊ぶ子どもたち、教育や安らげる場所を求めるストリートチルドレンやスラム街の子。それぞれ環境は違うけれど、皆に共通していたものは、どの子どももみんなきれいな瞳をしていたことと、与えられた人生を助け合いながら一生懸命生きていることでした。そこから私が感じたこと、それは、子どもたちの大きな可能性です。私が彼らと同じ年頃のときに毎日考えていたことと言えば、その日に何をして遊ぶかや、宿題をどうやって楽に終わらせようかという簡単なことばかりでした。しかし彼らは違います。アシュラムの「子ども村議会」の子どもたちは、自分達からおとなを動かし、村を変え、そこから社会を変えようと働きかけていました。

急成長しているインドの経済。その影響で被害を受けている子どもがたくさんいます。しかし、私はそんな社会を変えてゆけるのも彼らだと思います。そのために、私たち先進国や周りのおとなが子どもをサポートし、成長する手助けをするべきだと思います。

今回の旅で、ショックを受けることはたくさんあったし、目を背けたくなる時もたくさんありました。しかし、それが現状であり、平和に暮らす私たちだから知らないといけないことであると改めて感じました。インドでの体験をこれからも大切にしていくと同時に振り返りで行った「自分にできること」を実行してゆき、その連鎖を周りにも広げていきたいと思います。ありがとうございました。

自分の足元を省みる

竹内 悠（大学生）

私がこのツアーに参加したのはもともとストリートチルドレンに興味があり、子どもの権利やそれに関する取り組みについて学びたいと思ったからです。参加前にも勉強はしていましたが、実際に現地の様子を見て思ったのは、やはり自分の目で見て体感するに勝るものはないということでした。子どもや村の人々とのふれあい、スラムの匂いや風景は何よりも勉強になりました。

中でも一番印象的だったのが、バル･アシュラムの子どもたちの生きいきとした笑顔、そして自分の考えをもって表現できる意志の強さです。おとなからの不当な暴力を受けたり、劣悪な労働環境の元で働かされていたからこそ、自分の権利について深く考え訴えることができるのだと思います。基礎的な教育だけでなく、子どもたち自身に考えさせる教育をしているバル･アシュラムの活動は、次世代を担っていく子どもたちにとって大変意義のあるものだと感じました。

しかし児童労働から救出されバル･アシュラムに来た子どもたちは、やはり一部の幸運な子どもであるといわざるを得ないでしょう。恵まれた環境でスタッフの愛情をうけ、教育や職業訓練などもうけることができ、自分の将来について考えることもできます。一方街中には、救出できなかったり生活のために働かざるを得ない子どもたちも多くいます。日本と違って警察や行政も信用できないインドで、彼らのケアにも積極的に取り組んでいかなければならないと感じました。その役割を担っているのがバタフライズだと思います。ストリートで活動することで、子どもたちの問題を身近に感じ、彼らにとっての最善策を共に考えることができます。このような取り組みは児童労働の根本的な解決策ではないかもしれませんが、今のインドには必要だと思います。

また、子どもたち自身を児童労働から守るという取り組みだけではなく、周りのおとなの意識から変えていかなければならないということも、「子どもにやさしい村」プロジェクトなどを通して学びました。子どもたちの意見に耳を傾ける村の人々の様子が印象的でした。

今回の旅全体を通しては、自分の足元・日本の子どもたちのことを省みることが多かったように思います。自分の権利についてはもとより、将来の夢や目標、なぜ勉強するのかということについて考える機会のない子どもが多すぎるのではないでしょうか。インドで学んだことを、今度は日本で多くの人に伝え生かしていきたいです。

インドで子どもに会って考える旅　2009　感想

田中　由紀子（大学生）

私は、今回のようなスタディツアーに参加するのは初めてでした。私は、インドに行く前に授業で児童労働について勉強してきました。しかし、実際に行かなければ、わからない事もたくさんあるのだということをあらためて実感しました。

私は、インドに行く前は、バル･アシュラムの子どもたちとどう接すればいいのか、どうやってコミュニケーションを取ったらいいのかわからなかったし、他にも心配事がたくさんありました。最初のうちは、子どもたちが距離を置いている感じだったけれど、一緒に遊んでいるうちに、だんだん笑顔を見せてくれるようになったことがとても嬉しかったです。

バル･アシュラムの子どもたちは、本当に良い笑顔をしていて、素直で真面目な子どもたちでした。朝の掃除や草取りなど、誰もサボってはいなかったし、ノンフォーマル教育の授業を見たときも、みんな真剣に勉強していました。だから、そんな子どもたちの顔を見ていると、児童労働から救出されてきた子どもたちだということを忘れそうになりました。しかし、子どもたちの話を聞くと、長時間働かされ、食事も十分にもらえなかったと話してくれ、また、バル･アシュラムでは食事も教育も受けられて嬉しいと言っていたのがとても印象的でした。

バル･アシュラムの他にも、様々な団体を訪問して、いろいろな団体の児童労働に対する取り組みを見てきましたが、私は中でも、モバイルスクールが印象的でした。モバイルスクールは、少しの投資で行え、内容も易しく、子どもにもわかりやすい制度を作っていました。モバイルスクールなどによって施設を作らなくても、様々な形で子どもたちに教育を与えることができるのだと思いました。

今回このツアーに参加して、児童労働に対するツアー参加者の考えや、実際に児童労働をしてきた子どもたちの考えなど、様々な考えが聞けて勉強になりました。他の人の意見をたくさん聞くことで、理解できたことも多かったです。この経験を無駄にしないように、私なりに頑張りたいです。ありがとうございました。

子どもにとって大切なこと

田柳　優子（大学生）

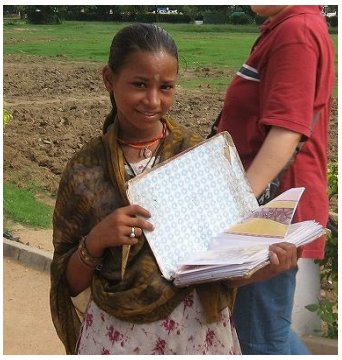
インドはやっぱり多くのことを考えさせてくれる場所。ここにはとても書ききれないので、特に感じたことを書きます。

バル･アシュラムで一人の子が「ここに来て最初は家に帰りたいと思ったけど、スタッフの愛を感じられたから安心した」と話してくれました。たとえ児童労働から解放されたとしても、誰かに自分の存在を受け止められていると感じられないとその先の人生を前向きに生きてゆくことはできないと思います。以前インド政府運営の施設を見学させてもらったことがありますが、そこでは出入口に常に大きな南京錠と警備員がはりついていて自由に部屋の外に出られず、スタッフも事務的に子どもたちと接しているようでした。しかしバル･アシュラムではおとなたちは笑顔で子どもたちと話をし、子どもたちの信用を得ているように見えました。特に笑顔が素敵なスメダ･カイラシュさんは、私たちを歓迎してくれた夜のプログラムで自分用に椅子が用意されているのに子どもたちの隣で地面に座り、歌や掛け声などで周りを盛り上げるのが上手で、何より子どもたちとの接し方が本当の母親のような人でした。活動家であり教育者であり母であり･･･カリスマ性がある人だなと感じました。私が今まで出会った人々の内尊敬する人の一人となりました。訪れる前に一番気になっていたのがスタッフ達はどのように子どもたちと接しているのかということだったので、おとなたちの愛情を感じられたことは本当によかったです。子どもたちに一番必要なのは物質的な援助よりも精神的な支援だという考えをさらに強くしました。愛を持って子どもたちと接すれば大きくなった時、次の世代にも優しくできます。実際ムクティ･アシュラム（デリー市内にある女の子のリハビリ施設）で生活していたという先生も子どもたちに優しく接していたので、この好循環はもっと広がっていけばいいなと思いました。

バル･アシュラムを離れた後初めて訪れた団体がバタフライズだったので、その二つの団体の活動方針の違いはとても印象的でした。子どもの子どもらしい権利を尊重するBBAと、ストリートチルドレンを児童労働者としての権利を尊重するバタフライズ。もちろん最終的には全ての子どもたちが労働から解放され整った環境の中で教育を受けられるようになることが理想ですが、そこまでの道のりは一本ではないと感じました。子どもたちの中には完全に労働からは離れたいという子がいれば、家族のために働いていたいと考える子もいるでしょう。子どもは本来働かないという基本的な知識を享受した上で自分はどのような手助けを得たいのか、子ども自身で選択できるようになればいいなと思いました。

一方で私たちはどのように児童労働問題と関わっていくか選択する環境に恵まれているので、そのことを意識し自分なりの活動を選択していかなければならないと感じました。

いっぱい情報と感動をもらってきました



伴野　保志（会社員）

バル･アシュラムは毎年少しずつの子どもたちの変化を感じます。今年は105人と大勢で、とてもみんな楽しそう！去年、少数ながら見られた暗い表情の子どもが、今年はいなかったのは気のせいだけでは、ないようです。それだけ集団として、とてもうまくいっているのだと思います。それはスタッフのみなさんの努力と工夫の成果なのでしょう。今年は日曜日の楽しいプログラムから入ることができ良かったです。レスリングは、男の子たちには、とてもすばらしいプログラムだとおもいました。そして日曜日は、徹底的に遊びの日にしたのも、とてもよいとおもいました。「麻袋飛びリレー」、「カエル飛びリレー」でへとへとになり、序の口！夜暗くなるまで、持っていった長縄跳びで遊び。初日に、次から次にいっぱいあそんだのは、とてもいい思い出です。夜の劇場では、今年も踊り、楽器、劇などをしてくれ、私たちも、持って行った鍵盤ハーモニカとリコーダーの伴奏つきで、「上を向いて歩こう」と「となりのトトロ」の「散歩」をみっちり練習して、演奏しました。楽譜、笛を持っていって、良かったですね。

「子どもにやさしい村」プロジェクトの村の人たちと子どもたちとも会い、多くの支援の方法について学ぶことができました。「子どもにやさしい村」の訪問については、去年は20名近くで訪問しましたが、村の人たちから、大勢で行くことで、なにか金銭的なものを期待されたらしく、今年は当初予定していた村にいけませんでした。他の NGO が物をあげたりした模様で、それが波紋を呼んだようです。何かちょっとした行為が、予想もしない結果を生むこともある。これからの支援の仕方や、スタツアを行っていく上で、とても大きな教訓になったと思います。その代わりに、バル･アシュラムに、以前訪問してくれた村の子どもたちとおとなの方が来てくれて交流しました。去年お会いした、スラジプラ村のとても積極的な活動家の女性の方と再会し、お話ししました。私のこともよく覚えてくれていて、うれしかったです。また、別の団体が支援する村に訪問することができました。その学校には6クラスで、先生がたった一人。でも、全クラスを回り、交流できたのは、よかったです。広島、長崎の鋭い質問をするインドの子どもに、関心しました。

そして、みなさんと先にお別れして、後半は一人 FTCJ（フリー・ザ・チルドレン・ジャパン）の学校建設プロジェクトの調査にウダイプール近くの2つのコミュニティを現地スタッフの人たちと訪問し、いっぱい情報と感動をもらってきました。多くの支援の方法について学ぶことができ、そして、少し自信も付きました。

ツアー感想

中本　映子　（会社員）

バル･アシュラム（子どものためのリハビリ施設）では 7 歳～14 歳の約100人の子どもたちが保護されていた。子どもたちは毎日規則正しい生活の中で心のケアをしたり学んだりしている。多くの子どもは明るく元気に過ごしているように見えて、ここが児童労働から保護されてきた子どもたちの施設であることを忘れさせる。

また、BBAの「子どもにやさしい村」プロジェクトを実施している近隣の村へ訪問・見学した時に学校で見た子どもたちは、みな真剣な表情で勉強していた。壁がなかったり机も椅子も無いことは、勉強することには関係ない。

実際に施設や村を訪れて子どもたちの生活に触れることで、子どもが元気に遊び、学ぶことは、理屈ではなく犯してはいけない大事なことで健全なことなんだと改めて強く感じた。

スタディツアーの後半に訪問した数々のNGOや国際機関では、多くの人が児童労働やストリートチルドレン撲滅に向けて活動をしていた。これらの活動は少しずつでも効果が出ているようだが、気が遠くなるような地道な活動だ。貧困、児童労働、教育問題、健康問題、環境問題・・・、すべてが複雑に絡み合っていて、何かカンフル剤を打てば大幅に改善されることでも無い。それでもそこにある問題に真摯に取り組む人々に感銘を受けた。日々、結果を急ぎすぎる仕事をしていると、結果が見えにくいことに対して取り組むことに躊躇してしまいがちだが、結果を信じてまず動いてみることの大切さを学んだ。

全部で 7 泊 9 日のスタディツアーはスケジュールが盛り沢山で、短い期間ではあったけれど多くを学び感じる機会を与えてくれた。私は企業でCSR（Corporate Social Responsibility）を担当する部署に所属し、企業の技術やリソースを用いて社会的課題をいかに解決するかを日々考え、他部門と連携して活動を進めているが、今回の経験は私の仕事への心構えに少なからず影響するように思う。またこのような機会を提供してくれたACEの皆さんに感謝し、私生活ではこれからもACEの活動を少しでも支援し、その先にいるインドの子どもたちの一助になれればと思う。

インドで子どもたちに教わったこと

並木　祥子（大学生）

私が児童労働という問題を初めてきちんと考えるようになったのは、ACE との出会いがきっかけでした。今回のツアーへの参加はかなり前から決めており、自分の目で児童労働の現実を見たい、そして考えなくてはいけないと決意していました。

忘れられないのは旅で出会った子どもたち。インド門ではヘナのペインティングでお金を稼ぐ少女に出会いました。気がつくとそばに寄ってきては、どうやって覚えたのか英語で必死に説得してきます。ところが私たちが断り続けていると、さっきまでの人懐っこさとは一転、私たちにはわからない言葉で何かつぶやき、さっさと背を向けて行ってしまいました。そのときの彼女の顔は忘れられません。一瞬で仕事の顔になった彼女。彼女はどうやって生活しているんだろう、家族はどうしているんだろう、たった 10 歳ほどの少女をこんなに絶望した表情にさせてしまう貧困って…。次々に思いや疑問が渦巻きましたが、そのときはその感情をどこにぶつけることもできませんでした。

それとは対照的に、底抜けの笑顔を見せてくれたバル･アシュラムの子どもたち。朝早くから元気いっぱい走り回り、大盛りのごはんをほうばる彼らと一緒に遊んでいると、自然とこちらも笑顔になり、たくさんの元気をもらいました。それでも彼らは全員、働いていたという辛い過去を持つ子ども。そう思うとなんとも言えない気持ちになります。しかしそんな子どもたちが一方で、児童労働をなくそうと力強くスローガンを唱えたり、子ども村議会では村の議員の子たちをまとめ、自分たちの権利や教育の大切さを説いていました。その真剣なまなざしと子どもとは思えないほどしっかりとした意見には、驚くと同時に、当たり前のように今の生活を享受してきた自らを省みさせられもしました。

ツアーから帰ってきた今も、あの子たちは今頃どうしているだろうと思うことがあります。私がこの旅を通して学んだことは、私が想像していたよりはるかに現実は複雑で、児童労働撲滅には本当に多くの時間と労力がかかるということ、しかしそれでも、「児童労働はなくせる！」という希望と強い意志を持ち続けなければいけないということです。今回のツアーでは、インドの現状とそれをとりまく貧困という大きな問題を目の当たりにし、児童労働という問題の難しさを改めて知る中で、児童労働撲滅への道のりは、果てしなく長くて終りがないように思うこともありました。しかし、様々なアプローチで地道に活動する現地の団体を訪問し、その取り組みやそこで働く人々の熱意に触れ、その成果も感じることができました。また村の訪問では、実際にそれまで働いていた子どもたちが学校で勉強する姿を見ることもできました。何より、子どもたち自身が児童労働をなくすために声を上げ、未来に向かって行動している姿を見て、私たちは何があっても解決をあきらめたりしてはいけないと感じました。今の私にできることは、ほんの小さなことかもしれません。それでも、この旅で学んだことを常に心に留めながら、行動を起こし続けようと思います。

インド

根本　泰良（大学生）

私にとってこの旅行が人生のターニングポイントとなり、この経験は私の人生において大切なものとなった。インドの子どもたちはどの子も目が綺麗で純粋で、強い生命力を感じた。

バル･アシュラムでの活動はこの先忘れられないと思う。私は過酷な現状に居た子どもたちは心に壁をもち、心を開いてくれないと思った。しかし子どもたちは自分のことを知ってもらおうと必死になって教えてくれた。日本にいると当たり前のことがインドでは当たり前ではなかった。教育に対しても誰も嫌がったりしていない。私たちは日本に生まれ普通のように思っていた環境。しかしそれは恵まれた環境であった。私たちが生活している日本こそ沢山の幸せが沢山あるのにそれに気付けていなかった。日本は自分の立場や居場所にとても敏感でそれが原因で自殺者が後を絶たない。インドでは貧困も激しく街を歩いていてもカーストの違いが眼にとって分かる。そしてマンモス大国である。一人ひとりの存在価値はとても小さい。しかしインドの人はなぜ頑張って生きられるのかとインド人に質問したら、「生き残る」と返答してきた。すごいたくましく、胸に響いた。日本だと「生かされている」という感じだ。だから平和に暮らしていけるのかもしれない。しかし私はこの現在に怠けることなくもっとたくましい人間になれるよう精進していきたいと思う。

インドの児童労働の実態は過酷で難攻不落状態である。NGO の人たちも廃絶という言葉は避けていたようだった。それはこの問題がどれほど大きいものかを物語っていた。私はバタフライズの活動について驚いた。路上で働いている現場に行ったり、モバイル・スクールをやったり目を見張るものがあった。インドの人たちがこの問題に対して深く考えていた。この問題がインドの人全体に伝わればきっといい国になれると思う。

私がこの旅行で感じたことは外国人という扱いでインドに来ている以上私たちの行動一つ一つ気をつけていないといけない。インドの人たちは「なぜ観光ではなくわざわざ児童労働の勉強のためにインドにくるの？」と疑問を持つ人がいた。この問題について、子どもと会って考えること。私たちからしてみればとてもいい経験ができ考えさせられた。環境が違う以上インドの人々はこの問題がどんなに残酷かわからないかもしれない。この旅では、母国の当たり前さを当たり前とは思わず一瞬一瞬を大切に生きていくことを大事にしていくということを学んだ。

バル･アシュラム～子どもたちと向き合う～

毛利　聡子　（教員）

今回でバル･アシュラムへの訪問は 2 回目ですが、BBA スタッフの子どもたちへの接し方が素晴らしく、スタッフの皆さんがどのようなトレーニングを受けているのか、とても気になりました。これは、前回は気づかなかったことです。二つの出来事を見て、そして聞いたとき、そう思うようになりました。一つは、シブ･シャンカ君（14 歳）とアルビン･ド･クマール君（11 歳）がバル･アシュラムに来るまでのいきさつを話してくれた時です。2 人は児童労働から救出されて、バル･アシュラムに来て、その後、一度は自分の両親の元に帰ったにもかかわらず、再びバル･アシュラムに戻って来たそうです。理由は、勉強したかったのに村には学校がなかったからだと言います。バル･アシュラムは勉強もできるし、何でも楽しい、いけないことをしたら怒られるけど、それは正しい道に行くためだと語ってくれました。この話から、バル･アシュラムのスタッフがいかに教育の重要性を説き、それを子どもたちが理解しているのかが伝わってきます。

もう一つは子どもたちの寮で誕生日を祝うセレモニーに遭遇したときのことです。スミダ･カイラシュ夫人(Mrs. Sumedha Kailash)が取り仕切る朝のセレモニーに子どもたちは、皆、車座になって静かに集中していました。その輪の中心に夫人と誕生日を迎える仲間8人がいます。輪にはスタッフも混じっています。子どもたちやスタッフが夫人を尊敬している空気がこちらにも伝わってきます。夫人やスタッフが子どもたち一人ひとりを大切にしている気持ちも夫人の語りから伝わって来ました。夫人の話す言葉を通訳を通じて聞いていると、人の誕生を祝うことの大切さ、この世に生を受けたことの意味を説いていました。聞いていて、日本では子どもの誕生をケーキやプレゼントで祝うのが当たり前のようになっていますが、何か大切なものを置き忘れていたことに気づき、ハッとしました。モノで溢れた生活の中で、生きることの意味、学ぶことの意味を私たちは日本の子どもたちに伝えることを怠っているということです。「教育は権利だ！」と訴えるバル･アシュラムの子どもたちと、権利が当たり前のようにあるためその大切さに気づかない日本の子どもたち、一体どちらが幸せなんだろうと考えてしまいました。

次に訪れるときは、スタッフの方々の教育に対する考え方、子どもたちへの想いを是非、聞いてみたいです。

スタディツアーを通して学んだこと

母袋　愛子（大学生）

私は、以前カンボジアに行った時に目にした光景が忘れられず、このツアーへの参加を決めました。その光景とは、私たち観光客に土産物を売りに来る子どもや、物乞いをする子どもが群がってきたことです。児童労働問題を改善させたい、その思いから今回のツアーに参加しました。

インドに到着し、デリー市内の様子は急発展を遂げている国とは思えませんでした。廃墟のような建物に人が住んでいたり、車道沿いには座り込んで物乞いをしている人の姿や、睡眠をとっている人の姿があったりしました。更には、ホテルの窓からインド人の女の子がインド人のビジネスマンに物乞いをしている光景や、お年寄りのおばあさんが公園でゴミ拾いをしている光景を目にすることになりました。そんなデリー市内での光景は、日本で、何不自由なく暮らし、必要最低限どころか過剰な買い物をしていた私をとても恥ずかしく、そこでの暮らしをしている人に対して申し訳ない思いにさせました。

その後私たちは、働いていた子どもを保護するためのリハビリ施設に、滞在しました。そこでは、子どもたちの施設内での日常生活の様子を見学したり、子どもたちから直接児童労働をしていた頃の話を聞いたりしました。自由な時間すら奪われ、食事も十分に与えられず発育が不十分な状態の小さな体で仕事ばかりさせられるという実態は衝撃的なものでした。児童労働をさせられていた子どもたちの話を聞いても、一人ひとりが本当に辛い経験をしてきたということが痛いくらいに伝わってきて、胸が痛む思いでした。しかし、そんな辛い経験をしたにもかかわらず、子どもたちは、一生懸命学び、施設での生活を頑張っていました。そんな子どもたちの姿を見て、いま働いている子どもたちを放っておいてはいけない、今回自分自身が感じたことを決して忘れないと強く思いました。

そして、今回のツアーを通じて、私は、前向きに児童労働をなくすという思いで行動を起こしていくということが大事なのだと改めて思いました。勇気をだして自分の経験を私たちに話してくれたインドの子供たちのためにも、私も今後児童労働がなくなるよう私自身何らかの形で活動をしていきたいと思っております。ACE の皆さん、参加者の皆さんお世話になりました。本当にありがとうございました。

子どもたちの笑顔にふれて

山崎　真実（大学生）

今回のツアーで一番心に残っているのは、ある男の子と話をしたことです。バル･アシュラムでの最終日、私は通訳さんを通して一人の男の子に児童労働について話を聞きました。その男の子の名前は分からないですが、とても笑顔がかわいくて、始めは恥ずかしそうにしていました。その男の子は、以前屋台で仕事をしていたところ、BBA のスタッフに保護されたそうです。屋台では何を売っていたの？と聞くとスナックのようなものと教えてくれました。仕事で1番辛かったことを聞くと、屋台で売るスナックを作っていたときにやけどしてしまったこと、と教えてくれました。そして、そのときできた傷を見せてくれました。男の子の顔はとても辛そうで、目にはうっすら涙がありました。私はその場にいられないくらいつらい気持ちになりました。そこで、ここに来ている子どもたちの心の傷はとても深いということを感じました。しかしその男の子は、バル･アシュラムに来てとても楽しいと言っていました。そのとき私は、バル･アシュラムのような施設を必要としている子どもがいて、バル･アシュラムのような施設ができて本当によかったと思いました。

私は、去年の春に別のスタディツアーに参加してカンボジアに行きました。そこでは、主にごみ山に行き児童労働をしている子どもたちの話を聞いたりしました。そこで私と同じ年の男の子が家族のため、また兄弟のために毎日学校も行かずごみを拾ってお金に換えて生活していました。その少年の顔にはたくさんのハエがとまり、全身真っ黒に汚れ、臭いも強烈でした。その少年は学校に行けないのはしょうがないと言っていました。私は目の前に生まれた場所が違うだけで同じ年の少年が、家族のために働かざるを得ない状況にあることを知り、ショックを受け、涙が止まりませんでした。また、目の前にいて自分は彼のために何もできないことがとても悔しかったです。そのときは、いくら支援をしても、働かなくちゃ生きていけない人々にとって働くことはしなければならないことなんだと思い、ただ自分の無力感が嫌でした。

しかし、その考えを変えてくれたのはバル･アシュラムの子どもたちの笑顔です。このインドでのスタディツアーに参加して、私が一番に学んだことは、無力だから何もできないのではなく、1人でも多くの子どものことを考えてあきらめないことです。バル･アシュラムで出会った子どもは、バル･アシュラムでの生活がとても好きで、新しい人生に可能性が広がり、目がきらきらしていました。無力で何もできないからあきらめるのではなく、私はそのような子どもたちの笑顔を少しでもいいから増やしていきたいと思います。

5. 参加者名簿

	氏名	職業	在住地
1	石田　恵理	会社員	愛知県
2	岩城　嗣郎	社会人	福岡県
3	岩附　加代子	社会人	東京都
4	奥山　純	大学生	神奈川県
5	川俣　真理絵	大学生	埼玉県
6	櫻井　優樹	大学生	東京都
7	嶌津　風花	大学生	東京都
8	竹内　悠	大学生	千葉県
9	田中　由紀子	大学生	東京都
10	田柳　優子	大学生	東京都
11	伴野　保志	社会人	東京都
12	中本　映子	会社員	神奈川県
13	並木　祥子	大学生	東京都
14	根本　泰良	大学生	東京都
15	毛利　聡子	教員	東京都
16	母袋　愛子	大学生	東京都
17	山崎　真実	大学生	神奈川県
18	岩附　由香	ACE 代表	東京都
19	成田　由香子	ACE スタッフ	東京都
20	召田　安宏	ACE スタッフ	東京都

※1～17 の参加者はあいうえお順（敬称略）